書類抄

二百五十四上

和書門
類
九五九五
號
二〇四
函
六
架
六七〇
冊

内閣文庫
和書
類
九〇九〇
號
七〇
冊
二四
函
一七
架

内閣文庫

番號	和 9595	
冊數	670 (322)	
函號	214	39

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

群書類從卷第二百五十四上　　検校保己一集

和歌部百九　家集二十七

散木奇歌集第一

春部　正月

堀川院御百首御歌元日

をしなべてまつはるかぎりなるかな

庭のをしきつるふしかなるかな人のたちぬるそでの初雲

立春日よめる

ゆきとけてかすみもたちぬ春の山

国立公文書館
National Archives of Japan

明原霞

千載
霞ゆゑ春の山路の道たえて
霞の中に立ちぬ空なる

一日の日ぬしあり
なかめをとてよめる

春たちてこの日ぬしあり
春ゆゑ山路の道たえたり

歌仲の春の八條の家にて人々あはせしに十首
おのおのけるふ霞の中に
春の日ぬしあり

清輔朝臣の仏山かすみのなかにこゆ
ちりぬ鏡のおもきのもとにかくれ
かすみの中に世をも北井の鏡面にさかなる新うつ
伊勢に侍りける比
春たちてなほ雪ふる
春の日ぬしあり

風をかすかにふきかへすもとはるの
桜の花ちりて十三の
ちるを

千載
ちりぬ山ふかきにかくれ
春の日ぬしあり

千載
煙にしるのやまとをみ
春の日ぬしあり

百首
霞をよめる

洞花
たのみたる
春の日ぬしあり

大武長実の八集歌
海道霞
春の日ぬしあり

後拾
春たちぬ
春の日ぬしあり

霞ゆゑ
春の日ぬしあり

いの世山ほとを合のを知ひすてかすみの衣けをあきてるらん
吉野山こ秋の梢はたなりをれて今朝い嵐ふ降ぬ白雪
大貳長實卿の白河の宿所にて歌合を行り
もるふ嵐代ふ秋ぬる
いたりしかすみよりし月ぬ雲のうち身をまつ入るく
嵐の強ふてすぬ
春きぬ山ぬ雲ぬ月ぬ嵐ふ吹きぬ原
高野山こ秋の嵐いたるひをし松の梢ぬ月ぬ吹
殿下にて関霞ふて来をよりる
山ぬ関ぬ霞ふ
仲勢の国に侍ける比つきの日ねつみ
田上ふ所に侍ける比この方ぬ行ける
いふ嵐ふてのくれるるもあれ
人の中ぬ
死ぬ山ぬ
仲勢の国に侍ける比つきの日ねつみ
いてて秋いて月をよりて
かやとりのひすをふ元ぬ

小さなるもとすゑつかたの人のなさけ花を
ちるぬさらもとひきてかつるこゝろあるを
春たちてとし物ゝ入ひとゝせ
別当実行乃ゝ家集歌ゝ合をしたけるゝ
ゝ日乃ゝろゝとゝ紅ゝ
ひすゝ山ゝのゝとゝ花ゝ月ゝ
山ゝさゝ乃ゝ向ゝ花ゝ乃ゝ月ゝ
てゝよゝ乃ゝ
なゝ中ゝ乃ゝ
百ゝ乃ゝ

いゝとゝはゝ
雪ゝ乃ゝ
ゝ百ゝ
百ゝ乃ゝ
寿日長の雪ゝ
山ゝさゝ乃ゝ七日中宮亀仲賢ゝ
はゝとゝ
ゝ
仲賢朝臣

屏風の絵に雪ふりたる里人すみかのまへにたてるかな

うちもろ我らなる

かすかのゝ雪ふる山にきえもせて雅たつかれなるをや見え

人のかよひけるみちの跡こそ侍るかなかへりてしふかゝる

みなとあし地しのふ名にかゝるさけふきちるつゝ

七日御禊のあしたなりける日よと侍る経宗のみこ（常イ）

よるまひるみかへてもとゝりけるかな

おほくの人もちかへりたる難波よも御祓とつきてかはへに播

めし

ほとゝきすはなきそめけるとはしるへきかなとなくなれは人のみなかきたる

人のめくみもたへてつかはしける

春のなかはつかれのあるに兼見ておはしゝを見て三月のひま世

人のかよひけるみちにかうひけるをみてよめる

いつみもしもかへりてつかはしける東へまかりける思ひかへして

伴将侍るらむとて山のふもとに一日御門にあつかりけるほと

いくらかに御杖かたへたてまつるとてよめる

まへにたてたる山にあさかほの垣に本もの杖をかけはあれなん

とはかりにつけける

あさ海や大河御禊の瀬もくもゝおほえは来たはせしなるを

おほくの民よみて人のかよひはしつる

そのかみ見えにけるよ時によりて世をふる人のかよふ所にてみゆるなりと
伊勢物語にこそ河内の国にてあるなり見わたせばかなたこなた
見えしらぬ也
御かへし顔見えぬ心を見せあはせ世に出でて見はやす人の庭にいかにみる
山のはにさきのこりたる雪いかにしてかくはかなき心のみ人こ
顔にあらはしてのち思ひはすこしのこるものなり兼盛
小集にもあるよし見えて思ひにせよとよめる
きのふ見し月のかげかはりぬるかな花のあたりにてもさえあかぬ北風かな
山家春雪といふ事をよめる
山里はゆきぞつもれるまがふ人こそ見えね梢にこそあれ花ぞ咲ける

雪はきえてもつもれるはなほのこりけるをよめる
いまはとてのこれる雪のまだきえぬ野べにもはるはきにけらし見ゆ
百首の中に残雪をよめる
立ちかへる春の志るしはかすみにてやまのしら雪きえぬ日ぞ経る
修理大夫のよみける
次郎
霜がれの野べにもはるはきにけらしまたきえやらぬ雪のしたくさ
いつしかと杜の鶯なくなるにまつもつれなき梢なりけり
鶯のなきつるこゑにさそはれて春のきざしはあらはれにけり
鶯告春
新勅
春きぬと鶯のねにしられけり霜の下草もえいでぬらん

鶯乃一こゑなりける

いそしらぬ河きこえひさしき梅や梅乃花にかをりこそ人

山家鶯といふことをよめる

新後
鶯のこゑをきかすは山さとにかはらぬ春の日数をそしる

百首哥中によみ侍ける

かすみたつ谷のふる巣の鶯はなへてもまた我しらぬ人の世にこそなきかわり

山家鶯といふ事をよめる

雪深き谷のふるすの鶯乃こゑもまたす春は来にけん

おなし心を夜ふけてよめる

山里はつねにまつらしひさしきの声を林の友となりけり

皇后宮にて人々まいりて哥よみ侍けるに

田中鶯といふことをよめる

金葉
鶯はやとも梅にかれはあれとなたたのまれぬ鶯の声にける

東北院の花さかりに人々あつまりてあそひ侍けるに

見てはあらましけれは梅も散りなんそなかれける

かかりけるに鶯の声もまつ逢てけふたつねきたると

とふ人も鶯の俤ふかく人もなしとて春の日をなかむる

かくはかりけふ梅花にほふ宿なれはこそいかにとひくらん

梅花夜薫

千載
梅の花あかぬにほひを遠くれとやみにもしるくれはかくれさりけん

梅花遠薫

新古
心あらハとハまし物を梅か香にたか里よりかにほひきつらん　兄集

大原の里にすみ侍りける頃絵にかきたる所へまかりて
よみ侍りける世をそむきて閑遊の人の家のつほね
女なとにあひてまつ入るに梅花風にさそひて男九
なつかしの人をちらさて見たるにおもきさまにおもひ
ゆへ薫る里たる花の色香にあらんはるのあか

梅花ちるまかりに風のさそふかな袖にかをる梅

百首歌中に梅花の題をよみける

いにしへの花を見ぬ人はまたふかき中にかほる梅のにほひのあか

皇后宮にて花園殿の家に梅花落水といふ事を
来をよみける
散りかかる花をそこにてむすふ手も水のなかれやせむかへるらん
二条師俊忠の月しくらる雪の梅にとりなさる
千載
咲きにけり梅の立ちえにかけてみる枝おれにそれとも
見えし
千載
山ふかみ春ともしらぬ松の戸にたえたえかかる雪の玉水
紅梅をよみける
次郎
今はとて花の梅かえ鳴鶯の身にしむ色のおもひそめける
梅花風にかをるをよめる

[illegible]

月照梅花

[illegible]

柳隠風

[illegible]

法成寺の花さくころ[illegible]

きさらぎ梅の花[illegible]

[illegible]

[illegible]

百首の中に柳[illegible]

[illegible]

二月

いまさかりなる花[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

遠見櫻花

[illegible]

中宮内侍殿の心を櫻にそへて侍従実房卿の

かくふけばうつろひやすき花の色を春の限と思へば

[illegible]

侍従実房

[illegible]

雨中櫻

[illegible]

中務卿仲實卿

[illegible]

歌院にて花下忘帰といへる

おほぬしのおいさかりなる花ゆゑにかへるこころを忘れぬるかな

深山櫻といへる

山ちかくをりてもみまほしけれどいとゞ風ふきまさりぬべしかな

遠山櫻といへる

雪をのみ見てのみやまをとはるゝ櫻ちるとは春のこゝろ

為花日書

春ゆきてこゝろのいとをくれぬるをたれかはるとはしらんとすらん

やどりをしまるゝ花ゆゑにあるときたにやうく書ぬ

ゆくはるをたれかはるとはしらんとすらんとけふをたにとはゞ

とゝめん

我ゆゑの花の枝をたにとゝめてあれもかへりとはしらんとすらん

堀川院に対面の時後の花見の法華会に法上菩薩

へるのはなつゝまつまをる

あるたにる櫻のもとにはなをるとへるとはなをるとへる

中宮の西堂に八重櫻さかりなるをみて亮仲実

あるとてをいてをあるいはるとふなるをみてをるとへる

小人をこゝろのうちにあるよ

八重櫻人をふけるをみるにこゝろのうちにあるこゝろ

多武峯櫻をみるとて山ちかきをのをのをるとへる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

花見んと[illegible]

くるる迄[illegible]待ける

春風[illegible]桜[illegible]

[illegible]

春の[illegible]

山家の[illegible]

左京大夫顕輔の八条の家にて[illegible]

あはれ[illegible]

[illegible]藤花をよめる

春きても[illegible]松[illegible]

堀川院御時百首[illegible]

[illegible]

[illegible]

二条関白家にて池辺[illegible]といふ事をよめる

春の夜の[illegible]池水[illegible]

観音寺殿の花御所にて晩見の花をこの
ごとしあり
夢ゆめしくしかさかえさせ給ひ
後ちとせをこのよにはひみるよ
かすがのゝ雪ふりしきてこの
春の花の盛は後人ちとせ
をかぞへつるかな
後拾遺大実房卿
春風にまかせてちるは
花なれはよはるはかりの
ものとしらはや

堀河院の位時の花ひらけるを面白の
おりとてまいりあつまりて
をりをりにかはりてをりをりの
はなをもてあそぶ
はるかすみたちまさりてはなの
ゆくへをしらぬ
はるのあけぼのゝ
ちりぬるかぜにはなのゆくへ
をしらぬ
はるのあけぼのゝ
ちりぬるかぜにはなのゆくへ
をしらぬ
はるのあけぼのゝ

又人にかはりてよみ侍る

桜さく大和もろこし山さくらおもてなき人にかゝる道は

洞庭花といふ事をよめる歌

いかに山谷ふかく入りておもひける花の咲る道

二条帥俊忠のもとの山里にて桜柳交枝といふ

ことをよみ侍る

あを柳にたれて桜の枝おもふ梢のいとは見えずなりけり

深山桜といふ事をよめる

流れすもかよふ人ぞなかりける山の道ちりしきてや花の錦を見るべき

花逢留人

人なさきいかなるまゝ桜の花をおしむ桜は名所ありとてなき

堀川院の御時賀陽院殿におはしましける比中宮

の御方の女房さそひて花見にかへりけるに桜ならで

さを折てあまりに枝を折つるまゝにまいりて池のほ

まへにさしてかはらへしけるを見て俊頼よみて遣ける

あかねさすひかりをそへて春の花ちりにしのちもいけにみえけり

世の中をみるまなこの春たちてこちたきまで見えし花かな

君の代々をかさねてきて花のすゑまでちよと見ゆる（祝イ　代々ニ　見ルイ）

故源中納言雅実のきみうせて後その法事の日僧の

見はやさて春の盛をすぐしつゝ我身のうへをおもひけるかな

いつとなく花のみ一むらさくつつしなきいはねのかけそ見えける

鶯谷大夫かゝりのふるへよりまつこたへりたるに庭
の花ちりしのちなくなりたるを見て人に尋ねて侍りける
むかしにあるよしいはむもよきふるかな
あらしふく山ちかき里に風なきは花の花のちるをしらさりけるかな

返し

人ことに道をさへたつる山の端に花のちりてそれかなしかる
風ふきたちておもひ出ては見えける花の色かな

見え

あさ霞風にまかせて今日もちる花の上そちらいくにも春ぞ

大貳長實乃亭にて三首会ありしに花をよめる
花ゆゑにこそ尋ねて思ひぬ心うきは桜よりのちやとしも春よ

花散るをよめる

読人不知
風吹けは桜もいまはちらぬ心の花の色もまちにしたえて

尋花越山

こえみれは山のふもとに見ゆるくも花ちる木の間
桜咲く下にて人々十首歌をよみけるに桜
をよめる

ちる花は庭の上には雪なれやあさき色のみえておのれ人の名

大貳よし南殿のさくらをみてよめる

九重ふたかさねてまつ春風のこゝろ花のあけぼの

なをしまあるはけるひ大貳長實卿のもとつかへし

しる毎

ゆく宮にのぼりてかへるいとゆ橋おひたる屋にて人々酒

遊

春ゆくちに春をおしみて花に人なれてゆくはるもまつ屋

指月を水鏡の花林院にて合し侍るとき

長隆卿のもとにてこゝろ

雅の文あるひとをんなの月をみるとて

曉月花

かすみのやの花のあるじ人にしたがひぬるひとをこゝろ

見山花

ほのぼのとあけぬる花の白雲のあるの明衣ぬきうつすこゝろ

大貳長實卿の白河の菊所にて花下旅宿と

いへるをよめる

春ごとの花をたのみにたちそめぬ

花成はるる

咲ぬとちる成なるこゝろ

越山見花

ちるはなの花のたよりにしらくもの

堀河院御時百首歌

春風

春風の吹くにつけても桜花
散りぬるかぜ
春風の吹くにつけても桜花
散りぬるかぜ

顕仲卿

春風の吹くにつけても桜花
散りぬるかぜ
春風の吹くにつけても桜花
散りぬるかぜ

けるる桜花

春風の吹くにつけても桜花
散りぬるかぜ
春風の吹くにつけても桜花
散りぬるかぜ

落花満庭

春風の吹くにつけても桜花
散りぬるかぜ
春風の吹くにつけても桜花
散りぬるかぜ

同

春風の吹くにつけても桜花
散りぬるかぜ
春風の吹くにつけても桜花
散りぬるかぜ

大納言実房卿

春風の吹くにつけても桜花
散りぬるかぜ
春風の吹くにつけても桜花
散りぬるかぜ

同

春風の吹くにつけても桜花
散りぬるかぜ
春風の吹くにつけても桜花
散りぬるかぜ

落花風

春風の吹くにつけても桜花
散りぬるかぜ
春風の吹くにつけても桜花
散りぬるかぜ

春思落花

春風の吹くにつけても桜花
散りぬるかぜ
春風の吹くにつけても桜花
散りぬるかぜ

対花厭風

春風の吹くにつけても桜花
散りぬるかぜ
春風の吹くにつけても桜花
散りぬるかぜ

池上落花

枝よりも風も吹きて散る事遅いちのもとも池の汀に知られける

土佐の前司歌合にて水上落花といふ事をよめる

かきつくる花の花も水の面にまがふ梢ぞ文殊なりける

尋山花

高砂のをのへの桜さきにけり遠き山の峰のあとをたづぬる

かた堂の桜さくらむ里なれば人にあるまじ寄り

花惜落花といふ心をよめる

見し人も桜の花の枝折り山路の枝折り尋ね人の名のみ立ちぬる

雲居にて花下述懐の心をよめる

すみよしの桜もいさしらず人行のもとに書ける花は風つくし書き出しつ

花下日暮

桜狩る花をめでつつ暮さむ日の入る事ぞ遠くなるもとちりしけぬまの森

藤花留客

たちかへる宿にかへさむ行人をとめて花に惜しむ心もあらなむ

白川の花の下にて暮しける人のもとにて詠める

みな陸源阿闍梨にかはりて

詞 身のうへ惜しむる花の下にて昔の世のみ思ひける

花欲少

はつ花の遠山里もすぎぬれば花の下には風の桜をまつ

花下述懐

櫻ちるをしかりしほどもみえなくにあかでもちるか花のみゆらむ

嘉宗ある乃宮に參りて冒雨見花といふことを

よみ人しらず

春雨の花につゝむにぬるゝ袖よりもあかでちりける花をこそおもへ

右京大夫經忠のもとにて山花隨風といふことを

こゝろをよみける

山風の吹くにもさかり花もさかりすぎぬる

大貳長實卿白川にて殘花惟家といふことを

よみける

なが川の里の花のさかりはすぎにけり風ぞさそふ心なりけん

堀河院御時きさいの宮の御方にて殘りの花ちりて

花殘梢といふことをつかうまつりて花の心をふたゝびよめる

前中納言匡房

吹風といひのがれても花もすぐさじとおもふ年の春もなし

又人のかへし

九重にうつりにし山ざくらさそはるやさこけの人まちらまし

水無瀬殿にて花あはれにてよみ院より人々まゐりて

よみ人しらず

花のちるを新たなる心みせて新なりて風もなかりける

雲林院の花のちりてのち人々ことにかけてよめる

[illegible]

播磨國風土記ニ云ハク

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三月

二月二日人のうひつうつ宮

[illegible]

二月二日乃至廿五日

[illegible]

同日[illegible]

播磨國[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

かへる一人の公卿よりあり

あらきなるやふ山田をそかへつる世人の名ひとり哉

かなしさのあまりの人のうへ事の葉の園をへまよひぬる

百首歌中よりあり蔵をよめる

五月雨はるる人もなきさびしさのなるとしらしかりけん

同百首中より春駒

五月雨はるるまなくしれてふあるまさりけり

五月雨をよめる

はる駒をあさ草ねるふかつりてつくしたくも世

拾遺後下より春駒をよめる

長の月ふかるるあしもかたくなる四位をすれ

百首の中より世哉

ふかきもの花はなかるる世哉

後下より百首中より世哉

ふかきもの世哉

百首の中より

苗代

あさるもの世哉

なるるの山里

今こそはまつもあくまれきてひるくとちりぬ花のあるかぎり
雖
ぞくしくなのあるかぎりあるこゝろ
庭風の猛き春山里さへ人をなやめてなるる不堪
ふたらくもまつ花とあるる
きさらぎのくもとなる春のうちはさへてあさぼらけ霞たえん
百首歌中より歌のこゝろ
風吹くなこゝろ春のまくらもとに夢さへ花の香ぞ
家集のうちより
上ようらうして春なる

やとのあるじ
逸
なるべしやとのあるじとなるべしやとのあるじ
水鳥のやまとなる
みるとなしかはの花の
代人の心里すて花のうしなる
なるなるなるなるなるなるなるなるなるなるなる
俊成卿女
二条院讃岐
山吹はなるべしやとのあるじ

堀川院御時肥後守こまつのまさとの
きさいのみやたちまさて西ノ京にて花を
ゆすりつるをうらやむ
ちきりなくくもゐの花をうゑおきてたれかは
かへりつゝ春をしるらん
山ゆきの庵室をとひけるに井ゐのゝ河原にて
故源中納言国信の房城の堂に中務卿仲実
住侍りしかくれにしのちひさかりしのこと
乃中きさいのみやの御ことを思ひいでゝ
ちりけるをうらやみて
ちりはてゝ人こそ問はぬ山ゆきの
庵のあたりの花のゆかりに
左京大夫経忠の八条の家にて花をうゑ
あるゝのこゝろをよみ侍りしに
百首の中に藤花
ふじなみのこゝろのまゝにかけてこそ
春をしるらん
堀川院御時百首歌
ちはやぶる
神のいさめの玉垂れの袖にまとひて花をまとはるゝ
二条関白家にて法皇後鳥羽院
春のこゝろをふくかぜに花は散たりけり

就音寺にて夜の花見ものしたる晩見夜花とつかう

うゝとゝあるか

夢ものくらかうゝくさくさ夜のくるひさかさまのひとをたん

夜ものしたる十三夜のくもの世ばひ寄るよ

かさりけるくちるはいとく雪ちるさ川春のめぐみ

廉風の絵よ夜さきたる郭よ宝人ちらる花と

さらくもくるくるくらくらく掛うえよ夜さてちるる箱とう世は

祇園大実那季就ちるの花さうなりと

実とんよ海ものもまるふけをつ世されいまりう事

よう発る

吹風きてちるのうとをんわうを、ものこは拾の花まるる

なりの花ちるもとうけるる夜みたあるる

掛あるに拾おうるるこうこ人四月はさもなるのこる

加賀国那辺の花のりもく関路花残るつる事

城よ発る

ちもそいをこに大関のかうこめさうとさ人るうえ先けるに

二月夜花色海いるる事ばるるに

かて事えもも拾ものに成ようにもくりもの成海ったん

やうもの乃はこうるもの小雪ものちるをうく

人るまるばるるこうもて雪よ人のうえ先ぬ雪うこおる

三月晦日時房のもとにあるさふらひ人々まゐりて
みなもろともにあそひつゝ
たちとまる春のなこりもをしけれはけふをかきりの
くらさしとおもふこゝろに今日暮てかへるはるをそしる
里信実朝臣
立かへる春を惜しむといかなる人かまたれつる
けふよりは[illegible]かなしかりけり
遠
暮てゆく春の名残をこそ人も待つもまたる[illegible]
をくるゝ物もうちのかなしかりけり

栖霞寺の羅漢供へまゐりてつかうまつりける　藤原春宮
とゝめえぬ春のなこりに
かへりゆく春のこゝろや寺のちかきの風にもとのさとをたつぬらん
三月乃晦日人々よみけるに
ちらはちれなにかはをしき春のかたみにのこる花もあらし
人にかはりて三月晦日の心を
春はたゝあひみぬものゝわかれ路にかつしらぬ[illegible]
百首の中に三月の晦日の心をよめる
春のゆくゑをたつねまし[illegible]ちかひをもけさは春のなこりなる
度下りて三月晦日乃こゝろを

夏部　四月

百首の中に郭公のこゑ聞くとあるの

郭公たちまちきくこゑ聞くもあるとて

なほのこる人まちかねて藤花の歌とある

藤ふけるまがきのもとの郭公

藤ぬれるまがきのもとの郭公

藤花隠郭公

いとゞしくなくこゑ聞くまがきの藤の花のもとにぬれて

百首の中に郭公をよめる

卯花を神のゑやまひとなしたるもたゞふぢなきこと也

源中納言の八条の家にて卯花をよめる

雪の降りかとみるまでさける卯花はたゞ人までたゞるらん

夏たちて卯花もちるあるとうたの花の多はなりてゝ見ゆるは雪かとのみもてなすなり

卯花作壇

卯花のかきねなりとうの乃をはなれて作壇

卯花隣

うたの花のかきねなりとうの乃をはなれて作壇

浦卯花

卯花はうらのうしろにうゑたるなり

卯花はうらのうしろにうゑたるなり

右京大夫経盛の六条家にあるうたの花の盛りなりとうの乃をはなれて作壇

卯花をよめる

卯花のうへにてなくほとゝぎすの涙もそこにいとゞ成てし

遠見卯花

うたの花のかきねなりとうの乃をはなれて作壇

卯花為客

卯花のさかりなるをみて山里にとまる人をふたりとなしたるなり

卯花をよめる

和歌所にて人々ものうたよみけるに花を折りて人に送りける

和泉式部

ふるさとの花の梢をみるたびに春をへだてぬ人ぞ恋しき

百首の中に

ちはやぶる宮の山のおろしにもあへぬ桜の花の散りける

桂の殺より人のもとにつかはしける

人をまつ桂の枝にかをるとて春をへだてぬ人ぞ恋しき

百首の中に橘花

たちばなのまがきのふかくにほふらん人の心ぞ恋しきかな

かきつばたをみてよめる

ちはやぶる神のいがきにかけてこそ思ひもかけぬ恋をしぬれ

返し

いかばかりかけてこそ思ひもかけぬ恋をしぬれ

初冬歌

時雨てし山のすそ野の紅葉ばの色なほ深くなりにけるかな

冬歌の合に人々かずかずにして歌をよめる

なにとなく物のあはれとながめつる夕べ

霜枯歌

数ならぬ我が身ひとつに冬来ぬと思ひもかけぬ霜の置くかな

みたのこすひきたれ燈せうあきたれ丈ひまるとち
郭公まゝ過
ほゝきたつきたつゝくなくこゑ聞るとたん
五月
夜図郭公
ゆうまつちきたれんかゝきたるこゑの枝を過もり
伊勢に行をるきさ月日郭公のいてゝなきき
うまとうひろ丈のもとりつひとりに行をる
郭公は夜月ひろ丈にとりあはせはひ
過ゝ

ほゝきたれあの方月ゆうまつちきたれんかゝ
夜ゆうまつちきたれ郭公の方ゝ
ちまつちきたれ郭公あれとつけ義
ゆうとしきたれかきちとしてんかゝきたれ人
郭公ゝ丈行つきゝきゝ行をゝ人も我方のゝ聞ゝ
ちゝゝ山風ゝ行をゝほゝきたれ郭公
年ゝきたれ行ゝ山ゝ行をゝ郭公
ほの丈ゝきたれの枝のかゝきたれ
かゝきたるゝ丈ゝ行ゝ郭公
郭公ゝ丈ゝ行ゝ郭公

郭公のうたとよめる

おとづれしなくなるものゝ名乃なかりせばあやめもしらぬ恋をしなまし

東宮雅平郭公

ほとゝぎすなくさつきの花橘の香をなつかしみ人のとはなる

郭公聞恋

たゝぬあふ恋をしてなれし郭公又ともなくてさみつゝ寝

関路郭公

ほとゝぎすなくこゑのかよはぬ関なれば恋しきかたの山ぞ遠き

山里に郭公をきく

なくこゑのたゝぬ山ぞなかりける

暁郭公

ゆふまぐれ今うちなくほとゝぎすあけぬるかたの山ぞ遠き

百首歌中に郭公を

五月雨の空なつかしの郭公ほのかにきかばいかゞ恋しき

待郭公

時鳥待つ夏たちぬ初音をいかに聞かまし

夏来待郭公

なくこゑをまつ夏来ぬ郭公

賀陽院殿の百合に対面式

待ぬ程ぬるよりあくるまつ夏の名をやたのまん

大貳長實卿乃亂ニ合戦ヲシケル歌

城ヶ谷　赤遠

ものあつまりてあそびしに人々ものうたうなりし

山中歌

かりまくらたちのゝ野ものをとかりそめにとまるをぬ

歌ニ驚眠

きりぎすのこゑたえたるにはに人かるきぬ

歌ニ

ものゝあはれ

雨中歌

ものあはれ

雨中歌

あれはてゝ世にふるものの板ゝまもとまるかなしき時雨

雨後ノ秋

家に雨ふりあるやうもしるし歌ニかゝる秋の板

侍歌

おもひしれ雨ふりかゝる時雨にぬれてはぬるゝ

路次院の仏殿二百ヶ所上の板ゝまもる所

かるつゆしげるふるさと

ほゝまつ波のくれゆくかゝりうつりてはのかゝりのもとのうら

私中歌

ちゝはゝのもとにかなしきこの板乃たまゝ

[illegible]
[illegible]
皇后宮御産の時の八条院御産の例
けるを勅ムもとより
[illegible]
雲居寺[illegible]
[illegible]
[illegible]
八条入道[illegible]の
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
故大夫の小弐[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

侍郭公

[illegible]

夜ふけて晩同郭公とうてあり

[illegible]

[illegible]

閑中郭公

[illegible]

晩同郭公

[illegible]

曉同郭公

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

毎夜侍郭公
ほとゝぎすとゝのつゞけてなくさせてそこゝかすゑをたのもしつる
をゝしなくこゑのさすがに成よあるゝ
弥生
年ゝゝきすきゝ初のこゑ北川よりまゐる一歌の人まかりこん
左京大夫経忠の八条の家にて卯月廿日
ほとゝぎすなくこゑのはつねをまつ人ゝ
中宮の御堂にて人ゝ
あやめ草ひかのそこひにしたにて初のこゑ
聖かたらひ
ゝゝきすの声は早苗代
たちなへ
ふるのたまもとりあへぬ
ゝゝきすの
十ゝ弥生は早苗を
おもはしかけ
おもはしかけてさなへのはるのもやうを
早苗をとるたのもしさの
けふたすもよ成てゝ
青柳や竹田のゝ面たちまはる
青春
てあまのゝ
らねこゝろ
年ゝ
あるゝ

左京大夫經忠の八条殿にあやめ侍りける
菖のうへはつるみぬるあやめ草ひかるみぎりやそ代のあ
長下ゝ七五月なるのゆふ代つくる海つまる
たゝさはのあやめふかるをそうやまるとたゝ望りはゝん
仁安法眼の妹の許より人とたるをくるとてある
あやめ草ながつるのくれなゐねこ〻ろまもなくなりにけり
返
ふかきさはのあやめかるとあるはあやめ草ぬ袖よ
五月なるのゆふ代つくる海つまる

あやめ草ぬるるにけるかるかるか

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大貳長實の白河の邸に歩行する事
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
義
[illegible]
山氣蒸蛍
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
遠近の[illegible]
百貫[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
六月
皇后宮権大夫[illegible]の八条[illegible]水風[illegible]
[illegible]
[illegible]

夏日越関

夏の色は行く人もとゞめかねてせきの関にぞ月はすまする

月前遠涼

さゝ川の山のこずえにかゝる月の影にぞすゝむ夏の夕べ

月前自秋涼

秋ぞ吹く夏の月にぞ見はてぬ梅の花ぞ秋の風

夏夜短

夏の夜のあけぬるかとぞ思ひ寝の月にぞ明かすなるかな

夏夜月

夏の夜の月にぞ明かすなるかな

夏月待

夏の夜の月にぞ明かすなるかな

山里の月のかげもまちぬるかな

別当実房の家の会に夏月とある

夏の夜の月にぞ明かすなるかな

夏月

あらしの山の月にぞ明かすなるかな

夏出歌

夏の夜の月にぞ明かすなるかな

夏の夜の月にぞ明かすなるかな

堀川の院に御ときに二月にてもちまうけたる

ほとゝぎすの月にぞ明かすなるかな

よのせはたらきをふかくまのあたり
いまの人は塵ばかりもこころをよせず
なをもてこれをあるかたちあるこれ
おもてこれをみるなかにやまもとの院のこゝろをおもひたまへ
雲居寺の聖人のもとにて瞿麦の花をこのみ
半ばよめる
朝露の玉かとみるまでにこれをこそ
やどるあるじとこゝろをやらん
けさはいかにみぬゆめとかはるらん
晩風如秋
久さしまてこそまくの風をとゝのへ人をもてなしたまへる
春ふかき夏ゝ五月雨のころ前栽院にて
けるふ竹風秋にいたる事ありける
秋来ぬと竹のうへにおくつゆ
避暑とゝのへる事ありける
こゝにはるかにみるかたちあるこれ
屋東方変種忠八条の彩色に泉為友といふ
つゝみ
辰の年のまの宿ずみにはひとりあるつゝみ
泉通鈴涌といふ事ありける

六月ころ世ちかくなりぬるに
世中のおそれなきやうにて
水の色銀にてつくりたる
せうとのやうなるものの
家もとりあつめ
いとめでたく陸の水にうかべたるも
百ぞくの中に家ぞくよりあるる
ひとりの井にあるものを
水の底にあるものを

すてきのみとはまりまきをもかぶりたる
おなじ船にあるる
ひとりの船にあるる湖をとりかこみたる
あるものをひとりの船にあるる
皇后宮校書殿
豊房
義
ちかのかたのもとにおもしろきの
樹陰風来
なさるもあるべしとて
蟬もとりあつめ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

世の中[illegible]

二条関白殿[illegible]

北里[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

百首の中より[illegible]

世の中[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]大夫[illegible]の六月朱雀の暁水雞[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

山里[illegible]

[illegible]

六月[illegible]

[illegible]

[illegible]月[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

水風如秋

[illegible]

[illegible]

[illegible]

蓮花[illegible]

[illegible]

[illegible]

散木奇歌集第二

秋部　七月

百首の中に　爲忠朝臣

ちぢにもなるべきものを七夕の　夕風とのみ吹くにしるかな

秋来ぬと　夕風とのみ吹くにしるかな

秋来ぬと　夕風とのみ吹くにしるかな

晩風告秋

夕まぐれ　吹きにし風の　たちぬれば　萩のうへ　ぞ　秋　なりける

乃ちぬのあつさといふる事成

秋きぬと　夜風　なれば　あつ　き　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

秋風や　涼　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

千載

秋風や　涼　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

羽

萩の　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

風底萩　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

遠夜風涼

ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

人のぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

ぜこれのみをもてのあそびとやうをる出れ合事もなく
修理大夫藤原朝臣六条殿にて七夕歌あるる
たなばたは望の夜く神まつりをすなをやあり言ふすきをろ
ふる伝ふる人くまをてさて歌ども詠ける七夕
人こと後歌
たなばたは夫のたなゆきおのひとへのうれやさんあるね涙
七月七日孝清ぬつ乃心ぼそく師中納言
基綱をそなめて言のよるもなけるる
一乗寺いとのひみるたなばたは後生てもや人のうらみをあらん
たなばたは秋ぬ夫る

うらみをもあるを言葉しはるをはのあをは
おいあるをいたなるうつりをあるをもやをあるね月日をを忘
千載
たなばたはわるのかををいく枕をくるあひあるね世界ハ
むをくるをいふ契をてたなばたはやあるね抱をあるん
織女恨暁
たなばたは秋ぬ恨ををうあきあるをたるね歌をまや
百をを年にて七夕のをるる後
あるるのをる後は二河をはあるを乃のるをたちやをあん
織女朔
たなばたは面れををあるをきをいをを涙ををあかをを

八月八日人々すゝめはうてまる
あひんこたちもつるはぬ紙をうちふかせまつるきる

八月

百首の中より賢成よみる

千載
ちるもくるまつのそてさはるこゝろ機の花のつゆ出ぬ

晩見野花

千載
色ぬるも花のあるしにやとりて秋の野をとへよとはん

野花留客

千載
秋色を省ふるこゝろ成族行て賢へとそ旅のすゝ也れ

百首の中より賢成よみる

あさ夕ゝよりてつゝ花すゝかるやとをとゝ(て)者のみまくはりけり

大原の法の中を燈の貌ふれこ第たとまり(る)を

ゝそかるゝ成りを成りをとこ成ふ成ゝ

たる所成ある

ちふかるふみを色てゝ西ろ四野やゝ物ゝ成ゝ成ゝ成ゝ

百首の中より賢成よみる

をゝみるゝしあさをくゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ

聖花隨風

かくつるゝ色をゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ

をゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ

みすのうちかたちのをかしきを女郎花たなれば春の野に咲けるを

雲陽女郎花

秋きぬとあはれとをしきをりをりに思ひ出でたるをりをりに

西中女郎花

つゆ草はたなびく雲にまがへてみるまがへ神にまがへむ

女郎花をとめあるを

たをやめにあらぬ物思ひて神にまがへて花の名なりと人のいふ

左京大夫経忠八条の家にて女郎花咲けるを

きりぎしにたちつゝふれば女郎花ときのあるはまろにしをけ

丹波の前司季房(重イ)朝臣家にて人々妹の花をよみけるに

女郎花咲けるを

咲きつゝもうつろひぬるを女郎花たちのぼりてをすれば

家花隠れ

秋の野に咲けるをみるとてこひしきを人に見せばしらんと

中納言俊忠の卿の花合せにつゆのもと

物をとはゞ露のいとゞもかなしきを露にぬれつゝ

江系宮内卿の屏風に人のかへりて

露風にみだれてをりたる女郎花えよりぬれぬ人もかへりて雨

秋雨寄秋

あきの秋ふるまつりにたちぬれてあまのかりにもあらぬ

百首の内に萩花盛あり

秋ぐさの花の盛りはあはれなれ
ひてはるもなくなるなきかな

基俊の家に婦人のあつまりけるに

花盛源こしつる幸成朝臣

あらし吹く萩の末葉の白露の
玉ぬきかけて散るかなしさ

風をもよほす萩

風をもよほす萩のうへの波こそ
たてるなりけれ

萩花盛風

同百首に水上萩をよめる

同百首に水上萩をよめる

秋風の吹くにつれてなびくもの
は花をもみぢの色にぞ

萩花盛風

たちくる秋の風にしたがひてなびくもあるかな成たゞ朝臣

殊賢法師の大原の房に風うちて萩如開花れ

かりそめにうゑけるなれどくちもせぬ
山里にはさかりなりけり

源頼政朝臣の人々萩花盛さかりなるを

堀川院御百首時屏上の人々萩花盛さかりなるを

萩の花ちるかとまがふ白露の
玉ぬきかけて吹くかぜかな

素覆

萩の花まがふ白露の玉ぬきの
風の吹くにぞ散るかなしき

田上の屏のせうとうにかきたる
萩の花ちるかとまがふ白露の
玉ぬきかけて吹くかぜかな

萩の花ちるかとまがふ白露の
玉ぬきかけて吹くかぜかな

[illegible]

[illegible]

[illegible]

久方の雲の中なる月なれば露ぞ雲間の光なる

出羽歌友

秋のよを宿りつるあるしんぜんの色さぬ人をうらやむ

百首歌中ふ出

ふるさとの山路の秋の夕暮れ月はこのもとふ出の杉の

ふるみちも成きてとまるる

雲間のゆかぬ月の光さえわたるも侍りてるる

ほの暗の夕月夜の雲間なく侍りてる

初月の雲井はるかに見えて雲間をもとめ侍りてる

百首歌中より

かりそめの宿をとはるる人まつ月をおもふ夕ぐれの

孫ノ宮雲

初月の雲間なりけり雲成るの行ともなりひ変るる

夜もすがら孫廣といつる月成よある

ひさかたの雲のうちなる月成なの出ぬ夕ぐれ

田上ふたのうもたる行よ上の宿てたつ成て

爽の田ぬくるもかりとの月ゆるる雁おくふかきちはん

孫廣ぬきたるふ風の吹る成月て

いくらもあるふちるん秋月のをりきまとの露ぞ月のる

国立公文書館
National Archives of Japan

又田の麻乃るくもをかすくるる
秋の田のあせつゝ[illegible]
百首歌中に麻成を見る
[illegible]
田よりも志のぶ[illegible]
[illegible]
夜深聞麻
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

とゆ山廉は河原をうちうへて風ふきたる時
はこの家の人扇合てし
此ろ屋ふきたる山廉の事成りよあきそ写る目録
廉成ちらへる
はちすのるこ云ふ所ふ名ふ廉はちすをれはかりを
夏ちらへ家上廉しいつる事成りある
秋ふ是はこのちらへ時ふ山るる萩のそひえはすする写り
陰ふ人ふはまりてしかるる所成りある
雨ふ流ふ所ふ人ふ廉は写りはたん
河内ふ紅梅はあふ面白ふ所ふ師反

無ひておくしけるふあるのふ所ふ所ふそさい中将
人七夕はあるもとふ所ふる所ふるふ成ふ所ふ
河のふふ人ふおもあそあそつ世ふふふ所ふ
ちるもふふもふふく所ふのよふ世ふのひふふふよふある
ふるふふくふふふふふた河雪ふ、雪ふふふみゆる梅ふふふ
雪ふの朝ふあふひふふふふふふふ成ふ
ふふふる
あふひふふふふのふふふふふふふふふふ成ふ服る
右ふ廉ふ保通ふふふふふふふふふふ秋ふ陽ふふふふ
ふ成ふある

春風のまことに花をたきるこいのあるをしらはいかゝ
　田上にて雪のふりてつゝみてせてはをとゝろ
　けはしきよめる
旅人はまことに成りまさりをやとりはまし行まに泊せるを
　月おもてをふかみるに旅のすまひふ雪降りてをと
　ていとをとりけるをみやこ乃人うめりはしれ
　ふ人に礼雪乃成りまさりをかゝ山のこしはきりたるのをとをと
　宮家の之乃扇合に雪をとの人る
　春日野にをとの雪もをとあれ松乃たちに成こゝるせをと
　後下にて田氣霧をとの成をとる

山里はをとをとに雪をとふをとの成をとをとをとをとせ
　偉子乃宿に弱迫したる雪成
みちまをとゝはきあをとの旅人まに弱乃をとをとをひ陸をとをく
　るをとこの中に弱迫成よめる
はをとに井をとけひのきをとをとふをとる中月のをとる
　ゆをとをけるをとをとをと

万葉集の中に搗衣とよめる

松風をとゝふ燈ゝ引きゝ衣打ちかたぶくゝ乃ゝ

搗衣のもとゝ成

燈ゝ世ゝ者ゝ多ゝ世ゝ者ゝ風ゝ吹ゝ者ゝ萩ゝ乃ゝ葉ゝ者ゝ

搗衣驚眠

ゝ乃ゝ月ゝ者ゝ入ゝ者ゝ入ゝ者ゝ風ゝ吹ゝ者ゝ

田家燈

山田ゝ乃ゝ中ゝ乃ゝ小ゝ屋ゝ乃ゝ燈ゝ吹ゝ者ゝ消ゝ消ゝ

八月ゝ十ゝ五ゝ夜ゝ月ゝ

ゝ世ゝ者ゝ入ゝ者ゝ入ゝ者ゝ風ゝ吹ゝ者ゝ

秋田

田ゝ者ゝ世ゝ者ゝ入ゝ者ゝ入ゝ者ゝ風ゝ吹ゝ者ゝ

秋乃田をよめる

山里はいとゝ秋風ふきまさる小田の稲葉の音ぞ

い孫乃ゝ世ゝ者ゝ入ゝ者ゝ入ゝ者ゝ風ゝ吹ゝ者ゝ

知らるゝたゝ独のゝ宿ゝ乃ゝ

船ゝ乃ゝ

衣ゝ者ゝ

ゝ乃ゝ月ゝ者ゝ入ゝ者ゝ入ゝ者ゝ

白川に水上月といふ事侍るなり

ちぎりおきしあきのやまのはつかりの
なくこゑのみにしぬるかな

江家集の歌に扇合に

春の代にたちかへりてもあるかなと
かすみのうへにあきのつきかな

秋月

あきのつきのあかしかげにてあるなるに
ものおもふ人のなにかなるらん

田家秋月

ちりぬるかぜにはなのかをとまれるに
ものおもふ人のなにかなるらん

大貳長実卿の家の歌に水上月といふ事
あきもこしのしらぬなかにあるなるに
ちりぬるかぜにはなのかをとまれる

ちりぬるかぜにはなのかをとまれる
ものおもふ人のなにかなるらん

いにしへのあきのつきかなこしのしらぬ
ちりぬるかぜにはなのかをとまれる

長和の比の歌に

あきのつきかなこしのしらぬ
ちりぬるかぜにはなのかをとまれる

後拾遺の歌に

あきのつきかなこしのしらぬ
ちりぬるかぜにはなのかをとまれる

水上月

ちりぬるかぜにはなのかをとまれる
ものおもふ人のなにかなるらん

あるかぜ波のをるまくさ谷のうもるみてもつきみるう
　　　

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋のすゑ月ほのかにすみてこゝろぼそくなるをり
あるとしあきけるに月はうつくしうてうたゝ
いとく
すみのぼる月やそなたの雲ぬけてはるぬ嶺のこゝろ
いくとせをさゝのさゝ人のちとあるやさきはつかりう
九月十三夜大井にまうでゝ船よりのぼりてきぬよ
たなこゝろのうちにまうでのぼりてはるの船めぐ
ゆくあきの月ぬれ船にのりてはるかにこゝろぶ
よ歌
紀貫之ちる花のなごりをしみてはるの月ぬれてをみ遣

大貳長実の家にて談合をしけるおりに
雅房の又ぬれ雲ぬ雲ぬ雲ぬ月ぬ
春ぬ又ぬ雲ぬ雲ぬ雲ぬ月ぬ
月前懐旧
ありし世ぬ世ぬ世ぬ月ぬ
百首の中に
出て
月前の
歌仲の

月はいとあかるく
海ちかくのこるなく花さきのこる花ども
又人まかせなるもよしある
いとこのひかりをまちてまつ月をいあるあまもいでつるけり
明月如昼
こるもしきの月の光はけうとくおもしろくけうとし
あるいとも月をみるよりあるる
あるは船をまちてきこえ満ぬせるなりあるこの月をあまた
漢霧明月
とまれかしと法まるなりあるもあるいとの月の光けうとし
禅祇伯殿仲のりこと九月十三夜くこのよるこ
斗なる月
まちいるるこの月をみるのあるのあるはのあるね
夜上おりもてうけるこの月をよめる
とる月をまちいるるこの月をよめる
月和歌集
あるいとおもしろ月のもとにあるもの
別当実行の邸の会の月をよめる
新陽のもとのこの月をよめる
雲居寺の月前遠情をよめる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

若くさは月ごとのみや始ひ出るらんけはくるはぬるの成

月前落葉

月新らしくさらさらとはかみちこそ成ちるもあるふさるほし

田上ゟ伯けるこゝろ九月十三夜つ後の事なるもも

こゝろ遣て始ゝろ出るゝ月ゝ成さへあくまで

なりゝ侍て

いふ月ごとの月ゝまこゝろ藤の成さへてきくゝる

夜下ゝ成緑山月と出るゝ成つふまはまる

あゝひもゝゝゝ成ゝ月成ゝゝのゝ出ゝ月ゝ成

田上ゝ成月のゝゝ出ける夜ゝ所夜のゝゝ

面ゝ始ゝの事れゝなひゝゝ成ゝ

いゝゝの面新ゝゝ成ゝて出ひゝくもある月の新

月の前ゝ出ゝゝはゝて魚のあゝゝかゝ

くみゝゝ成ゝ

ふゝゝ出ゝのゝ月ゝゝ成ゝゝあゝゝ成ゝ

月のゝゝんゝするゝゝて

月ゝ侍ゝ成ゝゝゝゝゝゝ成ゝゝゝ侍は

月の新ゝゝゝゝゝ成ゝ雲ゝゝ出ゝゝ

月ゝ侍ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

九月十三夜下ゝて

後拾
おくつるゐいるる山てさえうめてこそひの月の長岡の山
おくし公成人のりふてこそえる
昔こそ思ひなりし月のあとひもこゑぬ山ぬ山こそ思へ
秋の山月成みるといへるゆ成こそえる
さくらつまちるのみちをてふこそ山の月成こそ思
田よりこそうえおなるもふかもちぶきたる柳の末て
を風ふきこそ山ぬ山成をたるゆ月ゆまてこそ
見こそ思へかもある
河の秋月もおりぶなるこそ月こそ
ふの月おこそあるもの月のあるさ方こそ

かすみこそ思へこそ思へこそえる
ふもの月のあるの月を人こそ思成こそ成こそ
九月九日菊こそ
ちるもこそ思へこそあるのふ成こそ成こそ
菊菊
きくこそ月成こそ思こそ人こそ
田よりこそ成こそ九月九日ゆ成こそ成こそ
菊のあるくすきこそつこそこそえる
竹の葉こそ人こそ菊こそ成こそ我のこそひ成こそ
竹こそ成こそ成こそ成こそ成こそ

きてあれてくる紅葉まちとをぬるまの山の秋乃色をもそ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

たてまつる紀貫之

十そ方中にわかみちぞ
わかち葉なくてのこりたる河霧にあてしたがはてやおきそわびぬ

又人のまかりてとまりたる

雲ぬるあさぎりにけぬ秋下はてきてとりそ紀貫之

田上にそそくたに山にてよめる

ちぐさのやちけつをしのみち葉にはしてふみわけ紀式

保中納言雅望の家にて合る紀貫之

わかちぬ葉にまてみるこのあきはあれはなねしるもとの社

田上にまかりてみるに山にて雅望のいへにてよめる

とおくきてこちらけるにそてよみる

高山にのこれる紅葉よりはみち葉にあらぬ色をそ見ける

百首の中に田家紅葉

秋の田のみちぞ紅葉にしかりける

陸奥の国にまかりてよめる

みちのくにあはれたる山にとよ紅葉陸奥のくにの

秋風にちるのみち葉にふけの色の秋風にてかく

屏風にかきてよめる

あかつきにそのの歌にてる世にてるふ水色紅葉と

いつるのはしあるる

わかち葉にけたなくてなる紅葉にてをいるの秋

秋の雲よりさきにとぶものは
雁のこゑを秋よりさきにきくとは
つまこよりこそ出てあるらめ
ひとりのみたるなりけるを女郎花
あさくひとりのみたるなりけるを
女郎花をおもひてよめる
秋の雲とは
ひとりのみ
ひとりのみ
いとよりもあさきこゝろを分てとなん
秋ちるにはいとゆかしきものなれば
一秋もつるよりはなにはいとゆかしきものなれば
よみ人しらず

おもふこゝろをいとゆかしきものなれば
一九月に
菊の花にとりまぜてもかくれて秋ゆくらん
百首歌中に九月に
菊をしるべにかくれて秋ゆくらん
雲居寺の花の下にてたなばたをよめる
雲居寺の花の下にて
あまの川をわたる舟はかぜをいとはぬものなれば

撰集抄巻第四

冬部　十月

百首の中に初冬の心

千載　いとゝ思ふ煙の色にうつりあまりけふ来ぬる時雨降るらん

前中納言

同　落葉ちるこの下風に時雨ふる源もなほ残りてをけり

田上川みなびの山の紅葉ばは時雨ふるこそ色まさりけれ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

田上もさすがのこゝろの行ぶてあるひろふまゝ
みのりのみちをたゝてよりたる
ゆうてんこうしゆはすゝめ
おりのこゝろ時雨ぬ
いとゝ海のこゝろ
雨後落葉

紅葉ちるこゝろ
田上ゝ
一
紅葉せしかの里

ゝ
ちるこゝろ
あけくれ
紅葉ちるこゝろ
百首の中に
立田川
反古ちる
雲のゝ
紅葉の
全集
羽ゝ

山家落葉

雨過ぎて山里いたるみち荒廉よりも
大井川道遠ゝ水上落葉とゝまるの浪ゝ
風のもとゝ山ゝ小野山家ゝ旅宿落葉を
吹ゝ山ゝ風ゝ山ゝたゞ稀ゝ廉ゝ水上落葉

一 山家落葉

山里は冬ゝ山ゝ人の訪ゝ山ゝ
ちるゝみちゝ
はゝゝゝ山ゝ
落葉時雨
赤ゝ山ゝ
水山落葉
[illegible]
[illegible]
[illegible]

いく田乃社のまへをすぎて
ちかきまつを過てもみんとおもひ
しかれども行すぎて田の社をおがむ
[illegible]
[illegible]
大井川の道遠しと人々のいふを
[illegible]
[illegible]
[illegible]

はるかにつゆのあるあしたこの葉うえ初秋てらんなる風もあるあるよ紅葉のうれはくらるなてあるあ
ゆ秋はいちもさんにうるひをいきやるくもるる家成るあ
ぬ乃人まうてきて紫深水のつるるなるあ
みせまて人もすきあるうて堅をみ世小綱代のこれくせるう
風時夜田よおつ陽るるもてふるまて
たる人をのよるる世けるふ月照綱代のつるるる
るる
あるよ月れもあるぬるふ陽すおるるたるん
綱代

みるよ風てるるあるる毒ぬきあるもて紅葉つもしり
千月
山里まみるくてるる人もうきるをも波
るるるるるるるふるる
野行幸
ぬるるるるるるるるるるるるるる
人々十ぬ二のるるるるるふたるるるる
金
ぬるるるるるるるるるるるるるる
又人まるるるて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

雅波ゝはなをうるひくあのぶれかるもをなるふ
田上ゝ行をるまかりうあのうまうとうひなるうあや
しきまつけてくおるゝ
金
あ火たくまあれまゝの世界ぬあくれけるかゝ成り
百ゝ歌中ゝ神楽成ある
かりうみゝ神ゝるなゝ成ゝあるのゝれるものゝうつゝみひゝくれ
五節とつゝる事成ゝ
仏事
ゝ
ゝ
ゝ

いかなるきもあるれいはいとめなるあるかの袖のうへ

みやまはしらくもあるる

[illegible]

[illegible]

大原、[illegible]

まつてまあるる[illegible]

[illegible]

月光映氷

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

依月不忘秋

[illegible]

月のかつらをしけるあきにてちるまてに

いつくにかたちをとめてとうまて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

山嵐の雨

[illegible]

百首の内に水鶏

[illegible]

[illegible]

[illegible]

水鶏

[illegible]

[illegible]

氷閉水

[illegible]

[illegible]

氷閉河水

[illegible]

池氷

[illegible]

氷ふくる夜

氷満池上

家下て初雪成

初雪の

雪をとの

雪

山雪

高陽院殿

雪

加賀国

つゝ

雪

家道朝臣

春

大貳長實卿の亂りて談合をはじめ
まうる未の遂
雲かくれ雪ふりはじめ
辰下して雪中遠情をつくるのあつまつて
しく侘しきのわれ
頼仲と長ちかれ都を出陣あるべきまつ
あるべきを
まかあるる
雪はあるを着いてきるはかりなるそまり
田上乃山里にて雪に降りまたるべきあ

紫式部の行ひ乃あまをまふのるを我ひとめ
山雪はなるを
けるもあるを雪に雪つて若はなるをきの人はし
みを秋乃月とあるる
みるを山頂をる雪はかりなるを月は光をうみる
雪乃あるを女はかりつくるを
いそのを地乃はつるをきるを人はるをあを
十をを市に雪はかるる
雪ををあるの乃をを雪をの人をはるをはるを亀
又人をかくるを

国立公文書館
National Archives of Japan

歳暮述懐

佛名をとなへあるに

年中立春

百ぢの中より除夜

暁日よろこぶ

歳暮の歌とて

内閣文庫

群書類從卷第二百五十四上

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan